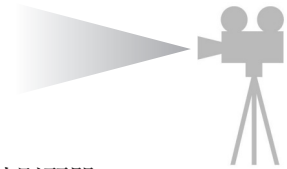




ラストシーン ①



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

映画館の暗闇。スクリーンのドラマはフィナーレを迎え、サントラミュージックの音量が高まる。ラストシーン。そしてエンドマーク。ようやく場内は明るくなっても、その余韻に浸^{ひた}ってしばらくは席を立てない。子供の頃からの映画好きにとっては、この一刻^{ひととき}の甘美なシビレもその醍醐味のひとつだった。そんなラストシーンのいくつかを以下思い出すまに。

『望郷』(39)

初めて大人の映画の機微に何とか入り込めた少年時代の思い出。全盛期^{せいけい}の精悍味に溢れるジャン・ギャバン。波止場の鉄柵にすがる瀕死のペペル・モコが、出港してゆく船上の女ギャビィの名を声の限りに叫ぶ。その瞬間、船の汽笛が高鳴り、ギャビィは思わず耳をふさぎ、その声は虚しく届かない。ペペの絶叫は、自らの波瀾に満ちた短い生涯への訣別でもあった。

『カサブランカ』(46)

敗戦直後。周囲は焼け跡だらけの映画館^{りっすい}。立錫の余地もない超満員。茫然と息を呑んだイングリッド・バーグマンの透き通るような美貌。夜霧の空港で、4度目の(君の瞳に乾杯)をささやき、別れを告げるハンフリー・ボガート。そして今や心の底から許し合う友人になったフランス人署長のクロード・レイズ。この二人が肩を寄せ合い、

夜霧の闇へ消えてゆくラスト。カッコよすぎると思いながら、不覚にも全身がシビれた。

『晩春』(49)

一人娘の原節子を嫁がせた夜、帰宅した父親の笠智衆^むが剥き始める林檎。突然ハタと止まる手、虚しく揺れる林檎の長い皮。娘の気配が消え去った空間。その背を包みこむ身を切るような孤独感。まさに余分なものを一切削ぎ落とす小津美学の結晶だろう。大輪の花だった原節子もこの時満開。私は自らの行く末が全く見えない大学生だったが、この父親の手と背に、初めて、これからの長い(人生)を見た思いがある。

『第三の男』(52)

これぞ衆目の認めるラストシーンの極め付き。冬ざれのウィーンの墓地。一直線の枯木道。据え放しのカメラが捉えるシルエット。決然とした足取りで近づいて来るアリダ・ヴァリ。路傍で待ちわびるジョセフ・コットン。万感を語り続けるクターの響き。後年、この道で、夫婦で同じシークエンスを演じ、カメラに収めて悦に入っていたら、地元のタクシー運転手から、(時折日本人カップルに限ってこれをやるが、一体何のマネかね。)と言われた。これは英国映画だから、地元では誰も知らない。このラストシーンに日本人だけがシビれるのは何故だろう。—————